

## 「ジャポニスム2018」続報 3

本号では、9月18日に開催された「ジャポニスム2018」広報大使の香取慎吾さんの個展の内覧会や同じ日にパリ日本文化会館で開催された同個展のレセプション、そして19日に初日を迎えた野村万作さん、野村萬斎さん、野村裕基さんの狂言公演について報告致します。

1

### 目次

- |                                 |     |
|---------------------------------|-----|
| 1. 香取慎吾広報大使の個展                  | 2～3 |
| 2. パリ日本文化会館での香取慎吾広報大使レセプション     | 3～5 |
| 3. 野村万作・萬斎・裕基×杉本博司「月見座頭」「三番叟」公演 | 5～7 |

## ① 香取慎吾広報大使の個展

9月18日午後3時からルーヴル美術館地下にあるカール・デュ・ルーヴルのシャルルIV世ホールで「ジャポニスム2018」の広報大使である香取慎吾さんの個展「アートの仲間」展の内覧会が始まりました。

若干早めに会場に着いた筆者でしたが、翌日の公演を控えた野村萬斎さんがその日の朝パリに到着したばかりにもかかわらず、香取さんへの友情出演、サプライズ参加ということで、会場に早くから来られていました。野村萬斎さんにご挨拶して話をしているところへ香取さんと木寺駐仏日本大使が到着されたので、成り行きもあり、木寺大使、野村萬斎さんと筆者の3人がアーティストである香取さん自身に会場を案内して頂く幸運に恵まれました。

2



香取さんの案内で作品を鑑賞する木寺駐仏日本大使と筆者（NHK ニュース--香取さんのInstagramより）

香取さんのカラフルな作品からはとにかく「楽しく明るい」という印象を受けました。これは香取さんの人柄そのものだ、と直接お話しして感じました。彼の作品は見る人を幸せな空想の世界にいざなってくれるような絵やオブジェです。会場を回っていると、ディズニーランドの「イツ・ア・スモール・ワールド」というアトラクション会場に入った時のような気分になります。

そういえば、抽象絵画の創始者と言われるロシア出身のワシリー・カンディンスキーの作品には「スモール・ワールド」とか「コンポジション」と題する作品シリーズがありますが、それらを想起させるような図柄です。また、筆者には音楽が自然と聞こえてくるような色と形に溢れていると感じられました。

香取さんは歌手でもあるので、作品に音楽が流れているようですね、と問いかけたところ、彼は「そう、音楽です。音楽をかけるのを忘れていました。」と言って、即座にこの個展のために作曲した曲を会場に流すようにスタッフに指示しました。この辺の臨機応変な反応はさすがだと思いました。

今回、日本からも多くのメディア関係者や香取慎吾ファンが訪れ、会場は賑やかな熱気に包まれました。



(左) 展覧会のタイトル・パネル (右) 香取慎吾個展・内覧会会場風景

## ② パリ日本文化会館での香取慎吾広報大使レセプション

カルーセル・デュ・ルーヴルでの内覧会后、午後7時からパリ日本文化会館フランス式5階のレセプション・ホールで香取慎吾広報大使を囲むレセプションが開催されました。

報道陣の前で挨拶に立った香取慎吾さんは、開口一番、「地下鉄が30分遅れたことを地下鉄に代わってお詫びします。」と言って皆を笑わせたあと、「私は子供の頃から絵が好きでした。・・・パリは大好きでこれまで何回も来ました。パリでインスピレーションを得て帰り、また絵を描く、それほど好きなパリで、しかもあのルーヴル美術館で初個展を開催できるなんて、夢のようで、幸せいっぱいです。ジャポニスム2018の広報大使で幸せです。」と嬉しさを言葉に表しました。

会場には野村萬斎さん、SMAPの仲間の草彅剛さん、稲垣吾郎さんも応援に駆け付けてくれましたが、これにはレセプション参列者も会館スタッフもびっくりでした。仲間たちに慕われる香取慎吾さんの人柄がうかがえました。



挨拶に立つ香取慎吾さん



参列した野村萬斎さんに向かい感謝する香取さん



鏡開き後乾杯をする主賓たち（左から安藤理事長、野村萬斎さん、香取慎吾さん、  
木寺駐仏日本大使、ダナ前駐日フランス大使）



一緒に鏡割りをした「仲間」を背後に携帯でセルフィーする香取慎吾さん

### ③ 野村万作・萬斎・裕基×杉本博司「月見座頭」「三番叟」公演

9月19日午後8時からパリ市立劇場「エスパース・ピエール・カルダン」でフェスティヴァル・ドートンヌ演劇祭との共催による杉本博司演出による狂言「月見座頭」と「三番叟」の初日公演がありました。

初日は野村万作と野村裕基が「月見座頭」を、野村萬斎と裕基が「三番叟」を演じましたが、翌日は万作が「三番叟」、萬斎が「月見座頭」を演じるのだそうです。

舞台空間演出は幅広い分野で国際的に活躍する現代美術作家・杉本博司です。今回は照明を極力暗くし、人工照明の無かった昔に能・狂言が演じられたような薄暗い空間が演出されています。舞台背後には白い「稲妻」模様の大幕が垂れていて、開演すると同時にまず観客の目に飛び込んできます。

杉本さんの話では、その稲妻模様は、カメラを使わず、水槽の中に高圧電流を通して直接印画紙に焼き付け、それを大きな布地に転写して制作したのだそうです。杉本博司コンセプトによる同じ稲妻紋様の衣裳を着た野村萬斎さんの、ポップダンスのような首や足の動きを採り入れたようにも見える、切れの良い動きとセリフ回しが特に観衆を魅了しました。途中のジャンプもアスリートのように高く飛び、非常にダイナミックでした。9月21日付リベラシオン紙にも小田原文化財団提供のそのジャンプの写真（次ページ）が掲載されました。



Pays : France  
Périodicité : Parution Irrégulière

Date : 21 septembre  
Page de l'article : p.1,6  
Journaliste : OLIVIER LAMM



Page 2/4

## THEATRE D'AUTOMNE



Sambaob. PHOTO ODWARA ART FOUNDATION

リベラシオン紙に掲載された「三番叟」ジャンプの場面（写真©小田原文化財団）

万雷の拍手を浴びた公演後のカクテルの場で、人間国宝の野村万作さんは、「月見座頭」で自ら演じた盲目の役柄について、「普通は上体を反った形で杖をつく人が多いのだが、私の場合は前かがみになった姿勢をする。その方がもっと杖でまさぐる感じがでるから」と役作りの“秘訣”を話してくれました。また、萬斎さんのジャンプに関しては、「今は若いからあれで良いが、段々年齢を重ねて来ると体力的に高く飛ぶのはできなくなる。しかし、本来は“低く飛んで重く降りる”というのがコツである。」と述べておられました。

今回の公演は、親子三代による共演でしたが、三世代による三人三様の演技の仕方が見られる貴重な機会でもありました。



7



終演後に左右の観客に挨拶する野村万作さん（中央）、萬斎さん（右）と裕基さん（左）

以上